



放

眼

日

中



リオ五輪にみる中国の変化

4年に1度の五輪が終わった。日本のテレビは連日、日本選手の活躍を中継し、夜も眠れないという人もかなりいた。だが、日本の放送はあまりにも日本選手に偏り過ぎている。4年の間に世界のスポーツ界がどう変わったのか、などという観点で見ると人はきつといないのだろう。

例えば、今回感じたことの一つに「中国選手に前回、前々回のような元気がないな」というのがあった。金メダルの数を見ても、中国は確かに前回より減っている。特に、日本が活躍した体操で、銅メダル2個にとどまり、お家芸と目されていたバドミントンでも前回のすべて金(5個)から、2個に減っており、競泳でも精彩がなかった。勿論、メダルの数がすべてだ、などと言うつもりはない。だが、何となく経済減速との関連を思ってしまう。

面白かったのは、これを見た周囲の中国人の反応だった。ネットなどで非常に話題を集めたのは、競泳女子背泳ぎで銅メダルを獲得した傅園慧選手。何といつても「自己ベストが出せて満足」との発言が驚かせ、そして決勝でメダルを取った後ののはしゃぎようは、これまでの中国選手には見られない天然キヤラだった。

「金メダルが取れずに申し訳ない」などと国民に謝罪し、うな垂れるのではなく、20歳の彼女が見せた姿はまさに90后(1990年代生まれ)、いや96后生まれ、といった感じがよく出ていた。

このような変化は、彼女一人のものだろうか。知り合いの中国人に聞くと「昔に比べれば、メダル至上主義から脱しつつある」との見解だった。8年前の北京五輪は自国開催でもあり、メダルが至上命題だったが、

今は個人の頑張りを尊重するムードが出てきたというのだ。

ある専門家は「昔は金メダルを取れば一生食べていたが、今は違っている。中国は豊かになってしまった。他の道で豊かになれるのであれば、そこまで必死にならないだろう」と説明する。

実際、金メダル報奨金が激減したとの報道もなされている。立身出世の道、豊かさを勝ち得る手段だったスポーツが変わろうとしている。それに合わせて政府も、スポーツ学校などに見られるスポーツだけできくばよい、という教育方針を変えようとしている。メダルを取った選手以外の数多くの若者が、その後生活に困り、社会の底辺に落ちているという実態も知られてきている。

日本の活躍に対して、日本に住む中国人からは「日本のゆとり教育の



コラムニスト・アジアウォッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

成果がスポーツに出ている」とか「スポーツ庁の新設など、日本の方が中国よりメダルにこだわり始めた」との指摘も受けた。女子レスリングを見たという人は「3試合続けて終了間際の逆転金メダルなんて、今の中国の若い子には無理。あつさりしたものよ」と嘆く。

その中国人を感動させたのが、郎平監督率いる女子バレーボール。予選をぎりぎりまで通過し、決勝トーナメントを這うように勝ち上がっていく姿は確かに感動的だったが、何だかこの姿、昔の日本を見ているようだった。

東京五輪で、中国選手はさらなる変貌を見せるだろうか。そして、国威発揚のために日本はさらなるメダル至上主義に入っていくのだろうか。何となく「国のゆとり」とは、と考えてしまった。